

ライン下り

中村 アキヤ

「初秋のフランクフルトへようこそ！」との機長の挨拶を背に受けてNはルトハンザ機のタラップを降りた。Nは五十歳、大手化学会社の部長で、今回は出張でドイツに向いたのだった。

暮色蒼然とした空港の外気はヒンヤリと肌に心地良く、着陸寸前になると決まって眠くなる、いつものあの倦怠感を払拭するには、軽い背伸びと深呼吸で十分であった。

見渡せば、すでに黄色くなった銀杏の大樹が、暮れかかる夕陽の最後のスポットライトを浴びて一段と輝きを増して見えた。

「お客さんは観光ですか？ フランクフルトはこのところ好天続きです。明日も天気を持てばいいのですが」とタクシーの運転手がお愛想を云う。

「観光で来たのではないけれど、明日はケルンまで移動すれば良いので、時間が許せば市内でも見物しようかな」と、Nは思っていることを告げると彼は、「時間があるなら、市内観光よりライン下りをリコメンドします。マインツまで電車かタクシーで行ってそこから船に乗れば良いのです。なんなら明朝ホテルまでお迎えにいつでもいいですよ」と愛想もいいが、商売も上手い。

その夜、Nはインターコンチネンタルホテルのバーでピルゼンビールを飲みながら、明日の日曜日の予定を考えてみた。久しぶりのフランクフルトだが、過去数回の訪問時に、ファウストを執筆したゲーテの家とか、十五世紀に建てられた旧市庁舎やライン河畔のニッツア公園の並木道、そして中央駅界隈のあの楽しいがチョッピリ危険な盛り場などをまだおぼろげに覚えていた。だからどうせまる一日をつぶすなら、タクシーで聞いたライン下りに挑戦するのも悪くはないなと思いついていた。

だが、日本を出るときはそんなつもりは毛頭なかったもので、このコースについては何んの予備知識もなければ、現在地とライン川、そしてケルンとの位置関係も定かではなく、ガイドブックの持ちあわせもなかったのが今さら悔やまれた。

「マインツまで行けば、そこからケルンまで、全行程船で行けますが、それは

お勧めできません。なにしろ急行列車で行けば一時間四十分のところを船では十時間かかるのですから…。

もつとも水中翼船では四時間弱ですが、いずれにしてもケルンに着くのは午後六時過ぎになります。ただコブレンツ下流には見るべきところが少ないので、マインツからコブレンツまで船で行かれて、そこから汽車に乗り換えれば、船旅が五時間、汽車は鈍行でも一時間ですから明るいうちにケルンに着くことができます。

どう行くかって？ お客さん、船に乗るには至極簡単。フランクフルトから七時二十一分発のSバーンに乗ってマインツで降りてください。駅前からタクシーで五分のところをラインに面したヒルトンホテルがあります。その前から船が出るのです。重い旅行カバンを持っていくつて？ 歩くところは少ないので全然心配はありませんよ。それでは良い船旅を！」

相談したコンセルジュに一方的にまくしたてられて、ついその気になるのはいつもの悪い癖だが、Nは明日の好天を祈りつつ、その夜は早めにベッドに潜り込んだ。

夜中にはポツポツ降り始めたとき、翌朝起き抜けに窓から見上げた空は一面厚い雲に覆われ、家並も舗道も黒く光っていた。朝食抜きで素早くチェックアウトを済ませ、ホテルの前に待機しているタクシーに飛び乗る。旅行カバンをタクシーのトランクに積みこんでくれたホテルのボーイにチップを握らせる。

「サンキュー・サー、カムアゲン」

「サンキュー、また来るよ」

ボーイに挨拶した笑顔が消える間もなく、Nはタクシーの運転手に向かって勢いよく行く先を指示した。

「中央駅まで」

「中央駅だって？ どの中央駅だい？」と彼は怪訝そうに聞き返す。

「フランクフルトの…」とNが言いかけると、彼は突然雄弁になって何やら早口で喋りだした。その弁たるや詳らかではないが、

「俺は朝早く起きてこのホテルの前で順番待ちをしているんだ。それなのにやつと乗ってくれたこの日本人はたった三百メートル先の中央駅まで行けという。

お前を駅で降ろしたら、またホテルに戻って客待ちの順番の最後に並ばなければならぬ。こんな事は耐えられない」というような意味のことを言うが早いか、頼みもしないのにさっさと運転席から降りて車の後ろに回り、トランク

からNの旅行カバンを降ろしてしまった。

すると待ち構えたように先ほどのホテルのボーイが飛んできてカバンを持つなり

「チェックイン？」と聞くのである。

馬鹿もいい加減にせい。いまチェックアウトしたばかりじゃないか！

フランクフルト中央駅はタクシーの運転手の言った通り、ホテルの真向かいのビルの二軒隣りに厳然と聳えたっているのは事実であった。タクシーを使わなくてもいいようにと駅前のホテルを予約してくれた、デュッセルドルフ事務所秘書の心遣いによくやく気付いて、遅まきながら感謝しつつNは駅に通ずる地下道を辿った。

駅は地下二層構造で、その構内には、プラットホームが合計二十近くもあり、随所に設置してあるエスカレーターを使えばそれこそ四通八達の筈なのだが、哀れな旅行者は何番線にゆけばいいのか、皆目見当がつかなかった。

なによりも人に尋ねるのが一番手取り早いのだが、どこを探しても有人の切符売り場が見当たらない。改札口がないので質問すべき駅員の姿がない。

早朝のためか旅行案内所もクローズのまま。取りあえずNは乗車券をかうと自動販売機の前に立った。当然、お金を入れれば切符が出る仕組みである。

まずマインツまでいくらかかるか表示盤を見るのだが、どこにもマインツなる駅名が認められない。なにしろマインツに行くには何線に乗ればいいのか、マインツはフランクフルトより北にあるのかも南にあるのかも判然としないのだから、表示盤を端から端まで舐めるようにチェックしても判らないのである。

やむを得ず、Nは通勤で忙しそうに歩いている人の中から、英語の判りそうなインテリっぽい紳士を選んでマインツへの行き方を聞いてみた。彼は下手な英語で、「フランクには出張で来ているので判らない」とのつれない返事。

がっかりしていると、この会話を傍らで聞いていた浮浪者がS十四番ホームへ行くと教えてくれた。フランクフルトの浮浪者は英語の判るインテリである。S十四番ホームは地下二階にあり、近郊からの通勤者でこった返していた。

次から次へと電車が入り、はちきれんばかりに客を詰め込み、そして出て行く。大きな荷物を両手に抱えた旅行者はあちこちでぶつかり、よろめきながらホーム中央にある時刻表に辿り着いた。

「あった！」 この時刻表には、フランクフルト飛行場駅やハイデルベルグ駅と並んでマインツ駅がちゃんと載っていた。ただし同じホームからICE（インターシテイエクスプレス）の表示のある列車や、レンブラントとかヨセフハイドンとかの洒落たニックネームのECナンバーの国際線列車も発着するようになるので、列車を乗り間違えないように依然として注意が肝要であった。

マインツに行くかどうか、しつこく周囲の人に確かめて乗った普通電車は、日本のそれと同じような満員の通勤電車であった。それでも二、三駅過ぎると大部分の人は下車したのでNは座ることが出来た。隣の席には制服の女子学生が試験シーズンなのかノートを広げて懸命に何かを暗記していた。

マインツ駅では大勢の乗降客の流れに乗ってなんとなく駅構内から出たのだが、気が付いてみればフランクフルトで切符を買った覚えがなく、Nはなんと堂々と無賃乗車をやったのけたのであった。

それまでは車窓にポツポツと水滴が着く程度の小雨模様であったのが、駅前に待機していたタクシーに駆け込むときには、かなりの本降りになっていた。タクシーの運転手は中年の小太りのおばさんであった。昨日教わった通りヒルトンホテルを指示し、ついでに今日の天気予報を聞いてみた。

おばさんは運転しながら片手を上下させて「レーゲン、レーゲン（雨、雨）」と答えるのだった。

ホテルでは船の出帆時間まで四十分あることを知り安心したせいか、Nは急に空腹を覚え、ホテルのカフェでゆっくり朝食を摂った。

出航時刻の十分前にNはおもむろに立ち上がり、ウエイトレスに船はホテルのどこから出るのかと聞いた。なんと三百メートル上流からとのことで、慌て傘もささずに雨中に飛び出し、河畔の細かい石畳の上を、ガラガラとトランクを引き摺って突進する羽目になってしまった。不規則な石畳の上を強引に急いだので、トランクの底についている小さな車輪がヒン曲がり、以後どこを歩いても、どうコントロールしても、このカバンは直ぐに左へカーブする悪い癖を覚えてしまった。

船着場には小さな切符販売の小屋があり、窓口の横にライン河の鳥瞰図があって、どこの町まで幾ら料金がかかるかひと目でわかる仕掛けになっている。

コブレンツまでは五時間余りもかかるので、少しでも時間を節約しようと、「有名なローレライを見てから鉄道に乗り換えができる町はどこか？」と聞く。とザンクトゴアールという町だということで、Nはそこまでの切符と英語で書かれた案内書を購入した。

棧橋に横付けされている船は、全長九十メートルほどの長さで、船腹には「ワッペンフォンマインツ」なる船名が読み取れた。客室は三層になっているが、最下層は荷物置き場に近く、中層は船窓の高さが水面とほぼ同レベルで、見晴らしがよくないので、Nは最上層の船室の一番前のテーブルに陣取った。そこは特等席である。テーブルの前のガラス窓からは、大きな錨が横たわっている。前甲板と船の舳が見えるだけで、船の進行に伴う景色の変化の全てが見えるのである。

マインツからの乗客は十人ほどで、日本人、中国人そしてアメリカ人の小グループのみでドイツ人は一人もいない。それぞれ窓際のテーブルに席をとった。広い船室が寒く感じるぐらいのから空きのまま、ドラの音も汽笛の声も聞こえず、いつの間にか船は岸を離れ、静かに河の中央に向かっていた。いよいよドイツ観光のハイライトのひとつライン下りの始まりである。

遠くスイスアルプスのサンゴダール峠に源を発し、ヨーロッパ大陸の中央を流れて、その歴史を眺め続けてきたライン河は、現在でも各国を結ぶ大通商ルートであり、この重要な通商水路を守りかつ利用するために、ケルン、ボン、マインツのような大都市が発達したのだそうだ。

また、かつては行き交う船舶から通行税を徴収した領主の館や砦の多くは、中世のロマンを秘めたままの古城の形を保ち、あるいは廃墟となったものも、美しい両岸の景色とあいまって随所に情緒あふれる観光スポットを提供している由、Nは期待に胸をはずませた。

スイスのバーゼルを過ぎてドイツ領内に入ってからのライン河は一貫して北東に流れ、途中ハイデルベルグの山裾を迂回してきたネッカー河と会合し、その後フランクフルトの市街を潤したマイン河と合流する。そして合流点にはほど近いマインツを過ぎるとほんの少しの間ではあるが、向きを変えて東から西へと流れる。

このライン北岸一帯の台地はラインガウと呼ばれるブドウ栽培地帯で、背後をタウナス山地に守られて南面する地勢は、弱い北ヨーロッパの太陽を精一杯受け止めるのに都合良く、幅広い川面から反射する光と熱の相乗効果のお蔭で、良質のドイツワインの産地となっている。自然環境ばかりでなく、短期間で成長し完熟するリースリングなどのブドウの好適品種の選定も、極上ワインの生産のための重要因子であるに違いない。

船はゆつくりと対岸のウイスバーデン、次いでビーブリッヒの栈橋に接岸する。ライン河を跨いでマインツとこの町を結ぶ橋から下流には、九十キロ離れたコブレンツまで対岸に渡れる橋はないのだ。広い川幅、満々たる水量、一年中ほとんど水位が変化しないのが、重要な産業運河たる所以である。

河に面した瀟洒な家並みの上に見える教会の尖塔や、ポプラ並木に続くヨットハーバーを過ぎると、やがて右岸にナポレオンやオーストリー皇帝、そしてメッテルニッヒと、時代によって所有者が替わったという有名なブドウ園のあるヨハネスベルグの城が見えてくる。続いて修復中のガイセンハイムの教会のドーム、次いでエーレンフェルスの砦が視界に入ってくる。

船は十分か二十分毎にある時は右岸、ある時は左岸から張り出している栈橋から乗客を拾いつつ航行する。

ラインガウの中心地リュースハイムの辺りの川幅は八百メートルにも達し、兩岸のブドウ園は山の稜線まで続いている。朝夕に発生する川霧と、ここだけはドイツの他の地方と違ってフランスのブルゴーニュに似ているという地質が格別のワインを産出する所以らしい。

ゆつたりと、本当にゆつたりと船は進む。

実にのんびりとした気分である。これで天気の良いれば云うことはない。

有名なワイン地帯を流れるナーエ河が合流するビンゲンの町の栈橋には、大勢の観光客が雨中に幾重もの列をなして船を待っている。栈橋には万国旗が飾られているが、あいにくの雨に、どの旗も重そうに垂れ下がるのみである。

何台分かの観光バスの客が一斉に乗り込んできたので船内は急に賑わい、ついには喧騒の極みとなった。濡れた人達の侵入で窓が曇り視界が急に悪くなった。日本人が大半の団体さんは、長い待機時間から解放されて、サンドイッチを食べだすおじさん、コーヒーを飲むおばさん、コーラスを始める若いグループ

プなど様々である。

左岸のモイゼ搭の廃墟がある小島の辺りから、ラインは僅かに右に湾曲するが、この先の右岸の町はアスマンシャウゼンといってラインガウ唯一の赤ワインの産地である。ブドウの種類はピノノールであるが太陽光が強くないのでフランス品ほど赤みが濃くないという。

左手に眼を転ずると小高い山並みに沿ってラインシュタイン、ゾーネック、ハイムなどの古城や砦が霧の中に現れては消えてゆく。

マインツからほぼ三時間、最初のうちは新鮮な喜びを感じていた船旅も、同じような景色の連続、同じ調子のエンジンの響きによりやく飽きてきた頃、なだらかな山脈が急に峻鋭な崖となって兩岸から迫り、ハイネの詩に詠われたローレライの地が近いことを予感させた。

タイミング良く「汝かは知らねど心侘びて」とあの有名なメロデーが流れる。乗客は総立ちになってカメラを構え、右岸を凝視するが、見渡したところ視界に入るのはなんの変哲もないただの険しい崖があるのみである。

暫くして崖の中腹に「ローレライ」と立札があるのでそれと判る、有名な観光名所に到達した。写真にも撮りようもない無粋な崖は、悲しい伝説と美しい詩に支えられた、創られた観光名所の典型であった。なんの取り柄のない崖の写真撮り終えた団体さんはそそくさと下船の用意を始めた。

次の波止場はザンクトゴールで、ここでマインツとケルン間を結ぶ鉄道に接続しているのだ。Nも四時間余りの船旅を終えるべく両手に重い荷物を下げて船内を移動した。ここで下船する団体さんの数は相当多く、下船口のある船の一階は多国籍のツアー客が犇めき、一部の人は下船を始めていた。これだけの人が降りるのは結構時間がかかりそうで、Nは自分が降りるのは最後でいやと、柄にもなく大人しく順番を待っていた。

しかし人の波は揺れこそするが、少しも進まないのである。そうこうしている間に船のエンジン音がひときわ高くなり既に船は岸辺を離れているではないか！

「ちよつと待ってくれ、私はここで降りるよ！」と叫んだのであるが、生来遠慮がちなNの声は、興奮した団体さんの波のような話声にかき消され、船員には届きそうもない。やっと声が届いた時はすでに遅く、

「インポシブル（不可能だ）」との返事がむなしく返ってきたのだった。

船は十分後にザンクトゴアールの対岸のザンクトゴアールハウゼンという長い名前の町に着いた。ここで団体さんの残りは下船し、岸辺に待機していた観光バスに乗り換えどこかに移動してしまった。

Nもここから渡し船で対岸に戻ればよいと思い、雨に濡れた波止場に降り立ち周囲を見回した。すると近くの丘の上に何年か前に来たことのあるブルグカツツ（猫城とでも訳すのか？）の古い城壁と石造りの塔が見えた。

予定通りにコトが運ばなくても時間的に余裕があるし、あわてる年齢でもなくなつたせいかなNは不思議に落ち着いていた。

「向こう岸に行く渡し舟はあるかね？」と船のチケット売り場の爺さんに聞いた。

「ナイン、どこに行きたいのかね？ ああ、汽車に乗るならこちら岸にも駅があるよ」と教えられて、Nは重い荷物を両手に、小降りになったひとけのない道を三百メートルほど離れた小さな無人駅に向かった。

鉄道はライン河の兩岸に並行して敷設されており、左岸の線が国際急行も走る本線であるのに対し、右岸のそれはマインツからコブレンツまで橋のない不便さをカバーする程度の貨物線兼用のローカル線であった。

学校の教室位の大きさの駅舎の中には汚いベンチがあり、壁には破れかかった時刻表があるのみの無人駅である。切符売り場も切符の自動販売機も、改札もなかった。時刻表をどんなに丁寧に見ても、何時に次の列車が来るのか理解できなかった。途方に暮れかけた頃、突然三両編成の列車が停車した。

Nはとっさに駅の窓から顔を出して、「コブレンツ？」と大声で聞いた。すると電気機関車の窓から赤ら顔の運転手が半身を乗り出して「ヤー」と答えてくれた。

「荷物があるからチョット待ってちょうだい！」とこれは日本語で怒鳴った。手前の線路を大急ぎで渡り、汽車に乗ろうとしたが、プラットフォームがないので、身長ほどの高さの汽車のデッキに重い荷物が持ち上がらない。やっと荷物と自分自身をデッキに押し上げ、モタモタしている日本人を辛抱強く待っていてくれた運転手に、感謝の意を込めて手を振った。彼はヨシツというように頷いて手をあげ列車を発車させた。

汽車はがら空きであった。四人掛けのシートを独占して辺りを見回す。隣のボックスには真昼間からピツタリと密着しているアベック。背もたれの反対側には居眠り中の鼻眼鏡のお婆さん、それにNをいれて計四名が一両目の乗客のすべてであった。

列車はラインに沿って北上する。対岸には川岸にへばりつくように民家が散在し、トンネルとトンネルの間に国際線の走る鉄道が見え隠れする。川の真ん中には三艘連なつた達磨船が静かに航行し、数分後に列車は、先刻までNが乗っていた観光船を追い越した。

ふいに肩をたたかれて、Nは一瞬寝てしまったことに気が付いた。早起きした上に慣れない乗り継ぎをこなして緊張が解けたためか、時差のせいもあったのかも知れない。ゴトンゴトンというリズムカルな汽車の振動に他愛もなく寝込んだものと見える。目を開けると年取つた車掌の皺だらけの大きな顔が眼前にあった。

「私は切符を持っていません」

「どこから乗って、どこにゆくのか？」

「乗つたのはザンクト……」

「ゴアールハウゼンでしょうか？　そして行く先は？」

「ケルン」

「どこ？」

「ケルン」

目的地はケルンである。ところがこの車掌はNの行先をまるで判ってくれないのだ。ケルンはドイツ語でK・O・L・Nと書かれる。Oの字の上にある二つの点はウムラウトと呼ばれドイツ語に特有の発音を要求される。この発音を大学の授業で教わつたのはO（オー）の発音をするように口先を尖らせたままでエーと発音するのが一番本物に近いとのこと、この場合Nもオーともエーともつかない発音を心がけたのだが、この年老いた車掌殿はNの必死の努力を無視して、執拗に「え？　どこだつて？」と行く先を尋ねるのである。

尤も、行く先が判らなければ切符を切りようもないので、しつこく聞くのも当たり前である。外国語にやや才能ありと自認していたNも、ことここに到つては恥も外聞も糞喰らえと、ケルンからコルンまでの考えられる限りのあらゆる

る発音を立て続けに声を出してみた。

遠くから見るといい年をした日本人が真剣な顔で口を尖らせて。「ケーケーコー」とやっているのだからさぞかし滑稽に見えたのかもしれない。このやり取りを聞いていた隣席のアベックが、矢庭に密着を解くなり車掌に向かって「コロン」と言い捨ててまた密着にもどった。

「ああ、コロンか、チョット待ってください。いま料金を調べるから」と車掌は納得して切符を切り始めた。

納得いかないのはNのほうで、コロンなんて町は見たことも聞いたこともない。あわてて紙にスペルを書いて「これがコロンか？」と聞くとそうだという。

そういうえば、フランスでREIMSと書いてランスと読ませる地名があったが、今回もそのデンかもしれないと、Nは自分で咀嚼できる理由を探して無理に納得した。

やがて汽車はマルクス城、ラーネック城を過ぎてラインに架かる鉄橋を左岸に渡り、コブレンツに到着した。ドイツの誇るもう一つのワイン、あの茶色の瓶のモーゼルワインを育むモーゼル河は、ここでライン河に合流するのだ。

ここからモーゼル河を遡及すれば、ルクセンブルグを通り容易にフランス領に入り込めることから、第一次世界大戦当時、ドイツ側はここコブレンツの町に司令部を設置したという。

コブレンツで汽車を乗り換え、Nは四十分後に目指すケルン（コロン？）に着くことができた。駅前というよりは駅舎の続きにドイツ最大のゴシック建築であるケルン大聖堂が威圧的に立ちはだかる。尖塔の高さは百五十七メートルという巨大な建造物は完成までに六世紀を要したという。

この町でNはオーデコロンに関する面白い話を聞いた。その頃までに大聖堂は完成していたかどうかは判らないが、一七〇九年にケルンの町でヨハン・フアリナというイタリアの香料商人が、従来とはややアルコール含量の少ない清涼香水をケルニッシュバツサー（ドイツ語で「ケルンの水」の意）として売り出したという。

この爽やかな香りは女性ばかりでなく男性にも愛用され、風呂上りや外出時などに使われる必需品となった。その後多くの店が類似の化粧品を売り出し、互いにしのぎを削る商戦を展開したのだが、結局ケルンの店の所番地をそのまま

商標「4711」にした現在の老舗が勝ち残り、今でもグロッケンガッセ通りの4711番地に堂々の店舗を構えている。

その後この町は一七九四年にナポレオン率いるフランス遠征軍に占領され、町の名称もケルンからフランス風のコロニーニユに変わった。ナポレオンの天下は十年で終わったのだが、その間にこの香水がオーデコロン（コロンの水）として革命下のパリで大流行し、遂にはオードラバンド、ハンガリーウォーターや、オードポーチュガルなどの香料水を凌いでオードトワレの代表としてもてはやされるようになった由。

日本では、その淡白な甘い香りと舶来品への憧れの故か「コロン水」として愛用され、これが端緒で「なんとかコロン」という名称の多くの化粧水が出現した。

甚だしいのは糸瓜から採れる液を母体とした化粧水を「ヘチマコロン」と命名発売して大ヒットを飛ばした化粧品会社も出現したという。

.....

「結局のところ、俺は朝六時に小雨のフランクフルトを発って、目的のケルンには午後四時に着くことができたのさ。思いつきでライン下りに挑戦したものの生憎の天候で素晴らしい景色にはお目に掛かれなかった。けれどいろいろ勉強になったよ」

帰国後、N部長は秘書のA子に出張の清算を頼みながら顛末を説明した。

「お蔭様でケルンとコロンが同じ土地の名前であったこととか、ケルンの町とヘチマコロンの妙な関係についても知る事が出来たよ」

これを聞いて、A子はすかさずNの向こうを張って駄洒落でゴマを擦った。

「さすがにN部長ですね。コロンでもただでは起きないのだから」

(完 9556字)